

「土香るラジオ文芸館」から一部抜粋してお届けします。今回はデリクさんです（2018年10月放送）

—はい、今月の「この人に聞く」は、この方です。

De みなさん、こんにちは。アイルランド出身の国際交流員、デリク・モールと申します。

—デリクさん、アイルランドの場所や歴史についてご紹介いただけますか。

・
・
（アイルランドの紹介は、ここでは省略します）

—ところで、デリクさんは有島武郎のことはニセコに来る前から知っていたとお聞きしましたか？

De はい、私はダブリンの大学で言語学を専攻して、日本語や日本の文化、文学を勉強していました。その中で、有島武郎について少し学んだのです。でも

その多くは、時代によって文学のスタイルがどのように変化してどんな作家たちがいたか、という内容の勉強でした。

ニセコに来て有島武郎の名前を聞いた時、最初は、自分が学んだあの有島ではないだろう、「有島」ってとても日本的な名前なので、別の人だとばかり思っていました。

ところが、2回目に有島記念館の展示コーナーを観た時、展示してある肖像画を見て、「あ、同じ！」（笑）それで、わかりました（笑）

—写真は大事だね（笑）で、有島の本は読んでいたんですか？

De 本は読んだことはないけど、作品の一部を読んで作家のスタイルを学んだことはありました。作家たちのグループの特徴とか、彼は明治から大正の作家だけど、その時代にはたぐさんの作家がいて、それぞれの作家についても少しずつ勉強しました。

—アイルランドの大学で、たくさん日本の作家の中で有島の作品も学んだというの、すごいことだね。ニセコの人と会話しているときに、有島武郎

のことが話題になることもありましたか？

De 宴会の場では、よく趣味を聞かれました。私が「読書です」と言うと、「あ、有島武郎ね」とつて、すぐ言われました（笑）

—有島武郎を読むのが当たり前みたいに言うんだね、ニセコの人。そう言われたら、「あなたは読んでますか」って聞けばいいんだよ。大抵の人は読んでいないから（笑）

—デリクさんが読書が好きということなので、今度は、アイルランドの文学の話を少し聞きたいのですが、アイルランドにはビッグネームの文学者がいろいろいますよね。少し紹介してください。

De イエーツや、「ユリシーズ」を書いたジョイスとかが有名だと思います。この「ユリシーズ」って、みなさん読んだことありますか？

—名前は聞くけど、読んだことないなあ。難しい、という印象があるよね。

De 他には、「ガリバー」のスイフト、「ドラキュラ」のストーカー、それから、ラフカディオ・

ハーン。

—小泉八雲だね！

De 彼は、ギリシアとアイルランドのハーフです。

—そうなんだ。日本人にとつては、彼はギリシアのイメージが強いけどね。

De ラフカディオという名前が、ギリシアっぽいですよ。お父さんがアイルランド人で、育ったのもアイルランドです。

—彼は怪談の作品で有名で、日本のあちこちで題材を取材して書いていますね。

De 私は、民族の文化の中に見られる伝説やホラー物語が大好きです。

—ガリバーにしてもドラキュラにしても怪奇的で幻想的な物語ですけど、アイルランドでは多いのですか？

De そうです。ヨーロッパではアイルランドは文学作家が多い国と言われるほど、文学が盛んな国です。

—そういえば、ノーベル文学賞の作家も何人もいますよね。調べてみたら、3、4人名前を見つけた。ぼくが学生だった頃には、サミエル・ベケットが

ずいぶん読まれていましたね。

De そうですね。でも彼は、アイルランドではフランスの作家と言われます。パリに長く住んでフランス語で作品を書いていたから。

—そうか、そういえばフランスの作家のイメージだったなあ。それにしても、アイルランドでは何故そんなに多くの作家が生まれたんでしょうか。

De アイルランドは、伝説とか物語の文化が強い国だからだと思います。

—ケルトの文化、ということも背景にありますか？

De そうです。国民の多くがストーリーに興味を持っています。—そういえば、オスカー・ワールドも、そのような傾向の作品を描いていますね。

—オスカー・ワールドといえは、「幸福な王子」が日本では有名だよな。

De はい、有名ですね。

—なんか、いい展開になってきましたね（笑）有島武郎も「燕と王子」という作品を描いているけど、これはオスカー・ワールドの「幸福な王子」の翻案で

す。今回、私たちもこの二つの作品を気にして、比べるために両方読みました。そしたら、結末部分はかなり異なっていました。その違いについて、井上さん、ちょっと紹介してください。

—はい、わかりました。物語の粗筋はみなさん知っていると、うので省いて、最後だけね。まず、ワールドの「幸福な王子」。

冬が来て寒さで燕は王子の像の足元で死に、みずぼらしい姿になった王子の像は街の人たちにみつともないと引き倒されてしまふ。それを天から見ていた神様が、天使たちにあの街で最も美しいものを2つ持ってくるように言ったら、天使たちは倒された王子の像の鉛の塊と燕の死骸を持ってきた。神様は王子と燕を祝福し、王子と燕は天で幸せに暮らした、という結末。

有島武郎の「燕と王子」は、燕は来年の再会を約束して南に飛んで行き、残された王子のみすぼらしい像は人々に引き倒され

铸造されて教会の鐘になり、毎夕優しい音色が街に流れ、みんなの心を和ませた、という結末です。

—デリックさんは、ワールドのこの結末をどのように捉えていますか。

De ワールドは、道徳を教えるストーリーの作品をたくさん書きました。この作品もその一つです。困っている人になんでもあげる人は、生活が苦しくなっても、後で神様が祝福してくれる、という道徳的な考えが表現された作品だと思います。

—どこか、イエスの復活を思わせる印象もあります。

De 有島とワールドどちらの作品も、最後はいいことがあったという点では共通していると思います。ただ、ワールドの作品には、有島の作品よりもっと深い悲しみに溢れているように思えます。アイルランドの文学は、そのストーリーがいつも悲しさに溢れています。その悲しさの中で泣くことはいいことで、それがカタルシス（心の浄化）と人々の幸福をもたらすのです。

それが、アイルランド文学の本質です。

—ということは、宗教的な思想が入っているということですか。

De そうです。

—アイルランドの「悲しみ」がケルト文化も含めたアイルランドの歴史に源流があるということとは、キリスト教的な文化だけでなく、ケルトの文化や歴史も反映されているのでしょうか。

De 多分そうだと思います。アイルランドは、国全体がキリスト教になったヨーロッパで最初の国です。その影響もあるかもしれません。

—ワールドだけでなく、アイルランドの他の作家にも、「悲しみ」は漂っているのですか？

De そうです。

—そう聞くと、ハーンの話も、たとえば「雪女」にしても、悲しみを感じます。ホラーだけでなく生きることがもたらす悲しみ、カタルシスを湛えていますよね。

De そうです。—そのような文化から、チャリティも盛んに行われるのですね。

De そうです。—さっきのワールドの「幸福な王子」の捉え方を聞くと、有島の「燕と王子」とも違う気がするけど、有島はどういうつもりで書いたんだろう。

De アイランドの文化の中に、

「残りがもう半分しかない」と
「残りがまだ半分もある」の受け止め方の違いで言うと、ワールドは前の方の考え方で、有島は後の方の考え方の違いがあるように感じました。

—そう言われると、そうかもしれない。武郎の作品には、悲しみがあまり表現されていないような気がする。

—でも、梅田さん、それはどういうことなの？

—それはたぶん、武郎が「燕と王子」を書いた時の状況が背景となつて原因しているんじゃないかな。武郎がこの作品を書いた明治41年は、彼が今の北大で英語の講師をしていたときで、狩太の農場を山本家から引き継いでオーナーになる年なんだけど、その山本家の甥っ子が病気になるんだよ。武郎はその子を慰めるために、手紙を何回かに分けて送るんだ。その内容が、オスカー・ワイルドの「幸福な王子」を翻訳したもの、というか、翻案だよ。それが「燕と王子」なんだけど、病気の子供を慰めるのに、「幸福な王子」の

結末は、少し悲しすぎると、武郎は考えたんじゃないかな。これはぼくの想像だけど。

—たしかにね。みんな死んじやうもんな。病気の子供には酷だよ、ね、あは。

—それにしても、デリックさんが出してくれたさっきの比喻、おもしろいね。もう半分しかない、まだ半分もある（笑）

—日本人も、酒を飲むとき、同じようなことあるよね。（笑）

—デリックさん、さっきの例は、アイランドとイギリスの間でもそんなふうには違ふんですか？
どっちがアイランド？

De アイランドとイギリスの間でもそんな違いはあると思います。でも、どっちがどっちの国か、ということになると、私もよくわかりません（笑）

—面白い話になってきました。ここで文学以外のアイランドの文化の話に移ろうと思います。その前にもう一曲、デリックさんのリクエスト曲をかけましょう。そのあとで、続きのトークをします。

（※トークの一部を掲載しました。）